

インフラツーリズムの更なる拡大に向けて 提言 (案)

1. これまでの取り組み

- 平成25年「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」において、インフラを観光資源として活用する「インフラツーリズムの推進」が打ち出された。
- 平成28年、インフラツーリズムを紹介するポータルサイトを立ち上げ、広く国民にインフラツーリズムの魅力を発信。

取り組みから5年が経過

2-1. インフラツーリズムの現状

- ポータルサイトで取り上げた施設の来訪者は年間50万人。
- 民間主催のインフラツアーも年々増加。
- 来訪者の多くは、宮ヶ瀬ダムや首都圏外郭放水路など大都市圏近郊にある一部のインフラに集中しており、インフラの魅力を十分に活かしきれない施設が全国に多数存在。

2-2. インフラツーリズムの課題

- インフラツーリズム拡大にあたっての課題

①施設の見せ方	③受入環境の整備
②広報周知	⑥持続性の確保
③対応要員の確保	⑦地域との連携
④安全性の確保	

3. インフラツーリズムの理念

- インフラツーリズムは、インフラへの理解を深めていただくため、普段訪れることのできないインフラ施設の内部や、日々変化する工事中の風景などの非日常を体験するツアーを展開することにより、地域に人を呼び込み、地域活性化に寄与することを目指すもの。

4. インフラツーリズムを拡大させるための方向性

- 土木広報としてのインフラの見学会に付加価値をつけて、人を呼べる観光資源としてインフラを磨き上げ、地域と連携して周辺観光資源への立ち寄りや地域への宿泊を促し、地域活性化を進めていく必要がある。
- 課題の解決や更なるインフラツーリズムの拡大に向けたポイントを「勘所」として、『人を呼び込むための工夫』、『より多くの人を受け入れるための工夫』、『持続的に展開するための工夫』に整理し、各インフラの現状や目標とするところに合わせて実施していく必要がある。

『人を呼び込むための工夫』

- ・施設の魅力を高める見せ方
どこを、どのように見せれば、迫力があるか／驚きがあるか／楽しいか 等を考え工夫する。
- ・インフラが生みだした空間の活用
インフラが生み出した空間や景観の「場」としての活用方策を検討する。
- ・施設管理者による情報発信
イベント情報は、分かりやすく、早めに周知していく。
- ・多様な主体との連携による情報発信
情報発信は“情報を伝える”から“魅力や価値が伝わる”へ転換し工夫する。

『人を受け入れるための工夫』

- ・民間事業者等との連携
観光需要が高い土日祝日での開催や受け入れ枠拡大に向けて、施設管理者主体の対応が難しい場合は、民間事業者、NPO、ボランティア等と連携する。
- ・現場における受け入れの工夫
参加人数が増えた際に、現状の施設環境のなかで対応するために工夫する。
- ・周辺施設との連携
インフラ側でトイレや駐車場等を十分に整えることが難しい場合は、周辺施設と連携する。
- ・事故を回避する対策
観光資源としての活用が想定されていないインフラの内部等を開放する場合は、十分に安全性を確保する。

『持続的に展開するための工夫』

- ・地域の協議会等での運営
インフラの観光資源としての活用について、地域の方々と連携し理解を得ながら実施していくため、地元関係機関等からなる協議会等により運営する。
- ・DMOや旅行会社等との連携による継続性確保
DMOや旅行会社等のノウハウを活かし、幅広くインフラツーリズムを展開していく。
- ・地域との連携
インフラツーリズムを地域活性化に繋げるため、観光客が地域で滞留するように周辺観光資源と連携する。
- ・多言語対応と観光資源としての魅力発信
訪日外国人旅行者にもインフラツーリズムを楽しんでいただくため、日本のインフラの機能性や土木技術の高さ等が伝わる工夫をする。

- 好事例を様々な事業で展開するために手引きを作成し、各インフラ施設で手引きを活用して、インフラ施設の魅力を高め、周辺観光資源との連携を図り、地域全体で来訪者を迎え入れ地域活性化に寄与するインフラツーリズムに育てていくことが必要である。



6. インフラツーリズムの更なる拡大に向けての取組

➤ 今後は、手引きを活用して、インフラツーリズム拡大を図ることとなる。そこで、モデル地区を選び、手引き内容を踏まえながら社会実験を実施し、成功事例として得られた知見を他地区において横展開していくことが必要である。あわせて、国内外に向けてインフラツーリズムの魅力情報を発信し来訪者数の増加を図ることが重要である。

6.1 2020年に向けての取組（インフラツーリズム魅力倍増プロジェクト）

2020年に向けての取組を『インフラツーリズム魅力倍増プロジェクト』と称し、取組目標を現在の年間来訪者数50万人（2017年）から2020年には年間来訪者数100万人とすることを旨とする。なお、量の達成だけでなく、質の指標（消費額、満足度、認知度など）を設定しその向上を図る。

目標

年間来訪者の倍増 2017年 50万人 ⇒ 2020年 100万人

質の指標の向上 来訪者の旅行消費額・満足度・リピーター率、一般市民の認知度・来訪度などの向上

（1）プロジェクト-1 モデル地区での社会実験の実施

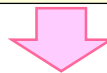
➤ モデル地区を選定し、今回作成した「手引き」を活用してインフラ施設の魅力を高め周辺資源との連携を図った上で、ファムツアー等の社会実験を実施し質の指標等も含め検証を行い、インフラツーリズム拡大に関する具体的な知見を得る必要がある。

（2）プロジェクト-2 国内外に向け魅力ある広報の展開

➤ 国内外の需要開拓が進められるように、現在のインフラツーリズムポータルサイトを多言語化するなどのリニューアルを図るべきである。また、インフラツーリズム情報誌、インフラツーリズムPR動画などの作成、インフラツーリズムシンポジウムの開催など魅力ある情報発信を展開していくことが必要である。

（3）プロジェクト-3 訪日外国人のニーズを把握したインバウンド対応

➤ 年間3,000万人を越える訪日外国人への対応として、訪日外国人のニーズを把握し、これらニーズを踏まえた“施設の見せ方”“受入環境の整備”“地域との連携”“魅力発信”などの考え方を打ち出しインバウンド対応を展開していくことが必要である。



6.2 将来的な取組

（1）インフラツーリズムのさらなる拡大

- モデル地区で得られた知見を他地域に展開しインフラツーリズムの拡大を図ることが必要である。
- さらに魅力向上のひとつとして、ガイド方法などのソフト面の充実を図ることが必要である。特に、ガイドを養成する方法などは、他分野の先進事例を踏まえながら検討することが望まれる。
- “今だけ・ここだけ・あなただけ”を念頭にプレミアム感のある見せ方をさらに工夫するなど、リピーターの確保も踏まえた満足度の向上に向けてインフラツーリズムの拡大を図る必要がある。
- 魅力向上を図りつつ、常に国内外にインフラツーリズムの魅力情報を発信していく努力が必要である。この場合、発信する情報（例・いつ、どこで、何が楽しめるなど）を統一するなど、利用者が情報検索しやすい環境を整えることが重要である。
- 計画中、工事中、供用中等の各ライフステージ段階でインフラツーリズムを進めるとともに、次のライフステージ段階（例・工事中から併用中へのステップアップ）で、より魅力あるインフラツーリズムが展開できる準備を整えることが望まれる。

（2）民間事業者の参入によるさらなる展開

➤ 土日の公開など施設管理者だけでは対応が困難である課題に対し、積極的に民間導入を図る仕組みを構築し対応していく必要がある。

（3）地域との連携強化

➤ インフラと地域との連携を深めるためには、インフラ施設の位置や構造形式等が決められた地域の歴史性や地形特性などを視点に、埋もれた地域資源の掘り起こし等を地域の有識者の方々と連携して実施し、来訪者を地域に滞在させる仕組みづくりを展開していくことが重要である。

「インフラツーリズム有識者懇談会」委員名簿

- 阿部 貴弘 日本大学理工学部 教授
- 河野 まゆ子 株式会社JTB総合研究所 主席研究員
- 篠原 靖 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授
- ◎清水 哲夫 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 教授

（敬称略・五十音順）

◎：座長

「インフラツーリズム有識者懇談会」開催実績

第1回：平成30年11月9日

- ・インフラツーリズムのこれまでの取組と課題
- ・インフラツーリズムの今後の方向性

第2回：平成30年12月25日

- ・インフラツーリズムの拡大に向けて

第3回：平成31年2月26日

- ・拡大に向けたまとめと来年度の取組について